

◆ 主な業績 ◆

1 リンゴ斑点落葉病に関する研究

主にスターキング・デリシャス等、本病に罹病性の品種が盛んに栽培されていた昭和40年代当時、福島県内でも激発して問題になっており、本病の発生生態の解明とともに防除対策に取り組んだ。その後、本病に対する薬剤耐性菌の出現に伴い、その対策にも取り組んだ。

2 モモ灰星病に関する研究

昭和37年以降、モモの無袋栽培の普及とともに福島県下全域でモモ灰星病が発生し甚大な被害を被ったため、本病の発生生態を解明し、その防除方法について精力的に研究を進め、病原菌の種名についても検討した。これら一連の研究は「モモ灰星病の生態ならびに防除に関する研究」として論文にまとめられ、昭和56年12月に北海道大学より農学博士号を授与された。

3 モモせん孔細菌病に関する研究

福島県の県北地方を中心に昭和40年代にモモの栽培面積が急増するなか、本病の発生も増加して被害が表面化したため、発生生態の解明と防除法確立に向け積極的に研究を行った。本研究により、収穫後～開花直前までのボルドー液をはじめとした無機銅剤の利用、生育期における抗生物質剤等による防除及び防風ネット等による耕種的対策を含めた防除体系として確立され、現在でもその骨格は広く全国のモモ産地で採用されている。また、本研究成果に基づき手引きとなる解説書が平成15年3月に(社)福島県植物防疫協会から(現在は(公社))刊行され、本協会のホームページからも閲覧可能であり、全国のモモ産地に対する技術普及における貢献は極めて大きい。

4 ナシ粗皮病の発生生態に関する研究

昭和49年に福島市の現地ほ場のセイヨウナシの高接樹の枝梢に粗皮症状を呈する接木伝染性の病害が発生した。本病はラ・フランスやマリゲリット・マリーラ等が病徴発現性の品種であるが、多くの品種が潜在感染性であることを明らかにした。一方、ニホンナシで同様の症状が認められる品種が確認されたが、セイヨウナシ粗皮病とは異なることを明らかにした。

# 落合さん（福島）選出

報農会  
功労賞 県果樹試験場長務める

公益財団法人報農会（東京都小平市）は第三十一回功労賞の受賞者を発表し、本県から福島市の元県果樹試験場長の落合政文さん（モシ）が選ばれた。

長年にわたり植物防疫事業に携わり、病害虫防除事業の推進、技術の普及、指導などに功績があった人をたたえている。

落合さんは浪江町出身。岩手大農学部卒。昭和三十五年に県職員となり、県果樹試験場

副場長、県農業短期大 学校副校長などを歴任。リンゴ斑点落葉病、モモ灰星病などの研究に目覚ましい成果を上げた。特にモモせん孔細菌病に関する研究では抗生物質剤による防除などの対策を体系化し、現在でもその資格は全国のモモ産地で採用されている。

落合さんは「私の業績が評価され、強く感激している」と喜びを語った。



表彰状を手にし、喜びを新たにする落合さん